

うるま市農水産業振興戦略拠点施設事業 かわら版3号

県外先進施設視察

いよいよ、うるま市に農水産物の直売所ができます。

うるま市農水産業振興戦略拠点施設事業、今回は市民代表の10名と共に、2泊3日の行程で4県5施設にわたって県外の先進施設を視察してきました。市民自らが特色のある成功事例を体感することで、施設コンセプトの充実を図ります。

今回訪れたのは、キックオフ講演会講師の松本先生が代表を務め、地域全てを巻き込んだ経営を目指している「道の駅うつのみや ろまんちっく村」。関東でも有数の産直売場を持ち、野菜だけでなく花木にも力を入れている「道の駅はなぞの」。一農家として本業のお米をはじめ、牛乳や葡萄でも6次産業化を積極的に進めている「永井農場」。市民自らが4年間かけて施設コンセプト作成に携わり、運営母体の有限会社まで立ち上げた「道の駅雷電くるみの里」。直売所だけでなく地産の物を原材料にパンやピザ、ヨーグルトなどに加工・販売する設備も持ち、観光客も数多く訪れる「田園プラザ川場」です。



成功している施設それぞれの運営方針は、その地域の特色や建物、立地を意識したものになっています。参加者はうるま市の特色を活かしながら、周辺施設などとも連携した運営、そしてそれをどのように施設コンセプトに反映できるかを考慮しながら、視察を行っていました。

更に「ろまんちっく村」と「永井農場」では、農業の未来に対して強い想いを持ち、成功している生産者の方々から、現在の問題点やこれからの展望などをお話していただきました。質疑応答の際には、参加者から「生産者が考える直売所の魅力」や「農業の6次産業化」、「農家自らのプロモーション方法」など、自立した農家の経営について積極的に質問が挙がっていました。

今回の視察で参加者は、施設の管理やマーケティングなど現実的なことも学びながらも、農家の「自分で生産したものを、自分でお客様に届けたい」という想いや、運営者の「施設を適切に運営することで、地域を活性化したい」という想いを実現している方々がいることに、強い関心を持っていました。このような「想い」を具現化するための意見も、施設コンセプトの重要な要素になっていきます。

生産者や運営者、そして消費者の「安全・安心」への想いに応えるために、うるま市はこれからも市民協働で、この施設をつくりあげていきます。

